

資料

益田地域におけるツキノワグマに対する住民の意識調査

金子 愛・金森 弘樹

Residents Opinion Poll on Asian Black Bears (*Ursus thibetanus*) in Masuda Area

Ai KANEKO, Hiroki KANAMORI

要 旨

2005~2006年、島根県西部の益田地域において、地域住民のクマについての知識、意識および関わりについてのアンケート調査を実施した。その結果、益田地域では30%の人がクマを目撃したことがあるなどクマの存在は身近であり、回答者の1/2がクマ鈴を持つなどの対策を実施したことがあると答えた。なかでも、匹見町の住民はクマの目撃や被害など接触頻度が高いことが明らかになった。そして、目撃や被害の多い地域ほど、また年代の高い人ほどクマに対する嫌悪感が強いことがわかった。

I はじめに

2004年の秋期、日本海側を中心に多くのツキノワグマ（以下、クマと表記）が人里に出没した。本県においても過去最高の目撃件数と捕獲頭数を記録した（図1）。大量出没の原因として、堅果類などのエサとなる資源の不作によって人家近くにある未収穫の果樹や養蜂の蜜蝋などに誘引されたこと、また、過疎化や高齢化によって集落周辺の山野が藪化し、クマが出没しやすい環境となってきたことなどが考えられる。

西中国山地個体群は、島根・広島・山口県に分布し、他の地域個体群から孤立しているため、環境省のレッドデータブックで『絶滅のおそれのある地域個体群』とされている。そのため、本県ではクマは豊かな森林生態系を象徴する種であり、生物多様性保全の観点からも将来にわたって健全な状態で存続させる方針のもと、1996年にクマの保全と被害軽減を目的としたツキノワグマ保護管理計画を策定し、また2003年から「特定鳥獣保護管理計画」を施行して各種の対策を実施してきた。しかし、クマが頻繁に農地や人家付近に出没して農林作物や家畜等に被害を発生させ、また人身被害を及ぼす危険性が高いことから、有害獣として捕殺処分を行う場合も多い。

現在、山間部においては、クマの生息域と人の生活圏が一部重複しており、クマの出没に関わる問題が今後も継続していくことが予想される。そこで、今後のクマの保護管理を推進していくために、理解と協力が不可欠な地域住民のクマに対する意識を調査した。

II 調査方法

2005年6月~2006年2月、旧市町村別に住民のクマに対する知識や意識、クマとの関わりなどについての調査を実施した。住民に直接聞き取る方法、益田市の各地区振興センターや津和野町公民館を通して住民にアンケート用紙を配布して回収する方法および集落座談会の際に配布して回収する方法で行った。

調査対象者数は、各旧市町村の世帯数の10%程度とした。益田市は人口と世帯数が他の旧町村と比較して多いため世帯数の世帯数の3%とした。

III 調査結果

益田市は524人（17,650世帯の3.0%）、美都町は117人（937世帯の12.5%）、匹見町は109人（732世帯の14.8%）、津和野町は217人（2,171件の10.0%）、日原町

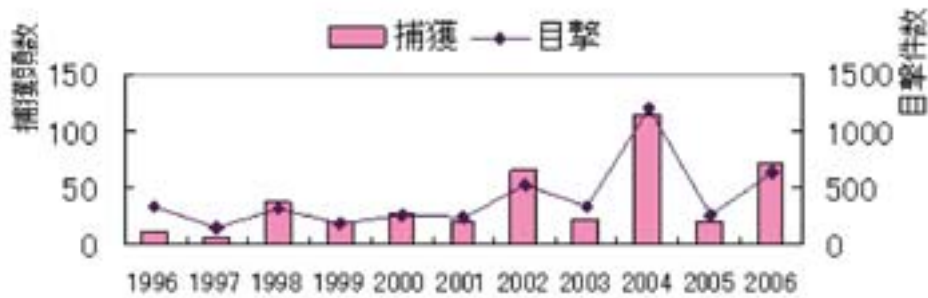


図1 島根県における年度別の捕獲頭数・目撃件数

■ 20代以下 ■ 30代～50代 □ 60歳以上 □ 無記入

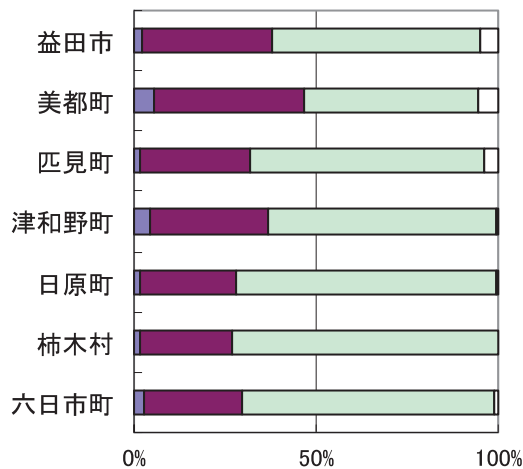


図2 市町村別回答者の年代

は156人（1455世帯の10.8%）、柿木村は65人（621件の10.5%）および六日市町は234人（2,253世帯の10.5%）の合計1,438人から回答があった。なお、世帯数は、2005年国勢調査地方集計結果表を参考にした。

アンケートに回答した方の年代は、10～20歳代が3%、30～50歳代が32%、60歳以上が62%を占めた。回答者の年代に大きく偏りが生じたが、益田市、美都町、匹見町では各地区振興センターに依頼したのに対して、津和野町、日原町、柿木村、六日市町ではほとんどが平日の昼間に民家を訪ねる方法で調査をしたため、60歳以上の年代の割合が高くなった（図2）。

1. 今までクマを見たことがありますか？

1,438人の回答者中で401人（28%）の方が見たことがあると答えた。市町村別にみると、匹見町が他の市町村に比べて多く70%の人がクマを見たことがあると答えた。匹見町の住民は他の地域に比べて、クマが身近に存在していることがわかった。ついで、日原町（40%）、

柿木村（40%）、美都町（30%）、六日市町（30%）、津和野町（20%）、益田市（10%）の順であった（図3）。

2. あなたは、クマが好きですか？

回答者の中で「好き」、「どちらかといえば好き」という好意的な回答は9%、「嫌い」、「どちらかといえば嫌い」という嫌悪的な回答は58%、「どちらともいえない」は27%であった。このことから、回答者の半数以上がクマに対して嫌悪感を持っていることがわかった。嫌悪感は、聞き取り調査で多くの方から、「クマは怖いから嫌いだ」という意見があったことから、クマに対する恐怖心によるものが多いと思われた。年代別にみると、10～20代は嫌悪的な回答が30%に留まったが、30～50代では40%、60代以上では70%となっており、60代以上がクマに嫌悪的なイメージをより強く持っていることがわかった。とくに、匹見町と日原町では、嫌悪的な回答が多かった（図4）。

3. 地域にとってクマの存在は？

クマが地元はどう受け止められているのかを知るために、「地域にとってクマの存在は？」と質問をしたところ、全体では半数が否定的、30%が容認している回答であった。市町村別にみると、匹見町と日原町で否定的な意見が多く、匹見町では60%が否定的で20%が容認、日原町では60%が否定的、30%が容認という結果であった。一

方、クマを容認する意見が多かったのは、美都町と津和野町で、否定的な意見が40%、容認する意見も40%であった。年代別にみると、10～20代の回答者は容認の割合が70%と高く、否定的な意見は10%に留まった。これに比べて、60代以上の回答者は否定的な意見の割合が60%と高く、30%が容認であった（図5）。

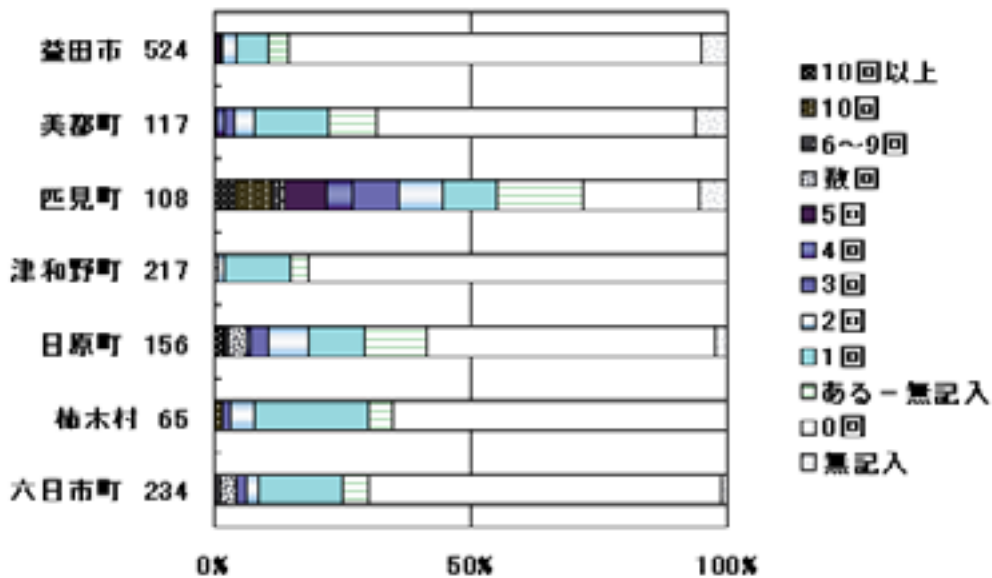


図3 市町村別のクマ目撃回数（市町村の横の数字は回答者数）

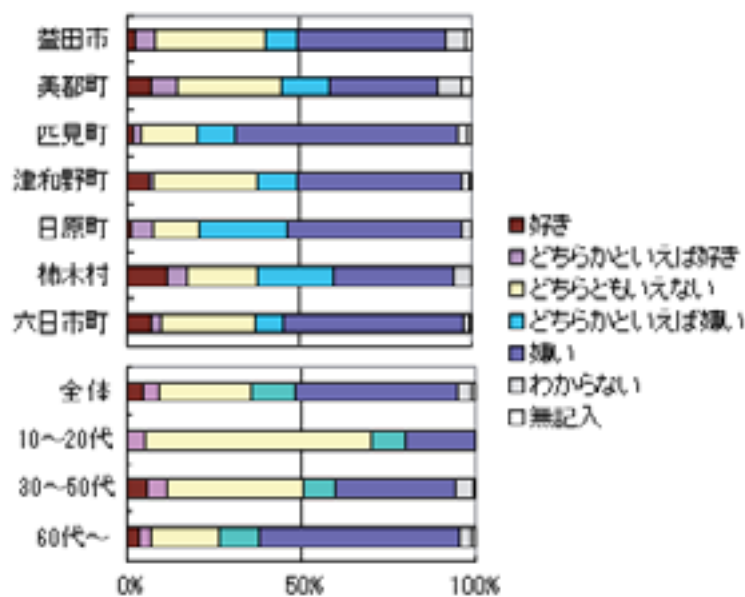


図4 市町村別（上）、年代別（下）のクマの好き嫌い

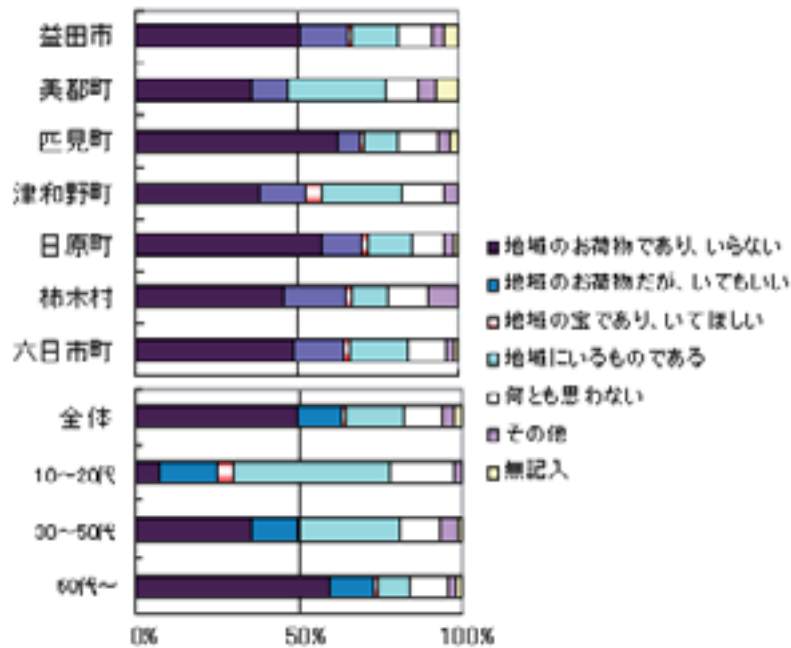


図5 市町村別（上），年代別（下）の地域におけるクマの存在意識

4. クマの食性は？

クマの食性は「雑食」（60％）と正しく回答した人が最も多かった。ついで、「植物食」（28％）、「動物食」（7％）、「わからない」（3％）であった。多くの方が食性について正しく認識していた。クマの食べ物としては、多くの方からカキやクリ、ドングリ、ハチミツが回答された。竹、魚、山にいる動物なども少数あった。

5. クマの大きさは？

「1～2m未満」（65％）が最も多く、多くの方がクマの大きさを正しく認識していた。一方、「2m以上」（21％）と回答した方の中には、ヒグマをイメージした人もいたと考えられる。「1m未満」（3％）と答えた方もわずかにみられた（図6）。

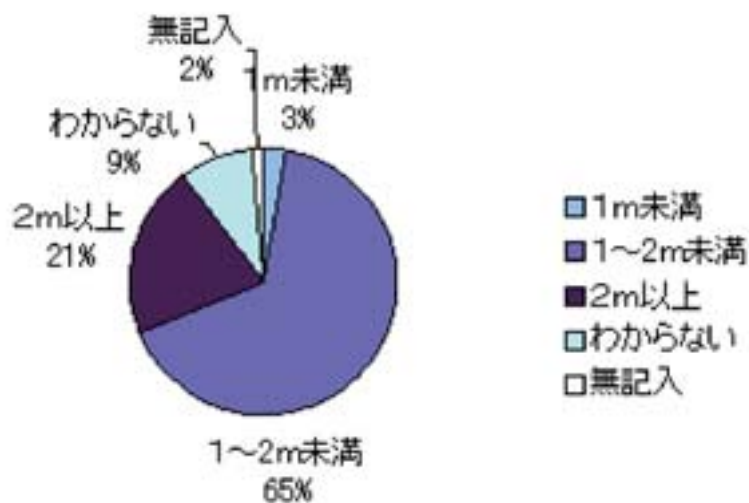


図6 クマの大きさ

6. あなたは、クマに遭遇したらどうしますか？

「ゆっくりクマから後退する」(63%)が最も多く、ついで「動かない」(13%)、「走って逃げる」(11%)であった。その他の意見としては、「その場になってみないとわからない」、「腰を抜かす」、「クマと目を合わせる」、「クマと目を合わせない」が目立った。クマに遭遇体験のある人の中には、「クマが遠くにいる場合はこちらから威嚇するが、近くにいる場合は逃げる」と回答した人がいた。「大声を発する、物を投げる」(3%)は少なかった。これらのことから、クマに遭遇した際には、積極的にクマを攻撃する人は少なく、多くの方はクマを刺激しないよう行動する、または逃げると考えていることがわかった(図7)。

7. クマは人と遭遇したらどうすると思いますか？

「まれに人を襲う」(67%)が最も多く、ついで「逃げる」(17%)、「必ず人に襲いかかって来る」(10%)であった。

「まれに人を襲う」と回答した方の多くは、「クマは人と遭遇した際には、ほとんどはクマの方から逃げるが、子連れの場合や至近距離で突然遭遇した場合にはクマが驚いて襲ってくる」、「人に傷つけられた手負いのクマだと危ない」と認識していた。しかし、回答者の10%が「必ず人に襲いかかって来る」と回答し、クマの基本的な性質等についての知識の普及が必要であることがわかった。

クマの生態や行動については、多くの方が正しい知識を持っていた。これは、2004年度のクマ騒動の際にTV

などのマスメディアで放映された情報を通してクマの知識を得た人が多かったと思われる。また、クマが頻繁に出没する地域では、集落などで情報交換が行われており、クマと遭遇をした人がどういう行動をとったのか、いつどこでクマを目撃したのかなどの情報が広く伝わっていた。

8. クマ対策はしていますか？

回答者の約半数に当たる723人が何らかの対策をとったことがあると答えた。一方、何もしたことがない人は661人(46%)であった。このことから、益田地域の住民は、クマによる農作物被害や人身被害防止への関心が高いことが伺えた。最も多かった対策としては、「鈴を携帯する」が444人、ついで「家の周囲からクマの誘因物の除去」が152人、「クマの活動時間の外出は避ける」が133人であった。その他の意見としては、「ラジオを携帯する」が多かった(図8)。

9. これまでにクマによる被害を受けたことがありますか？

これまでにクマによる被害に遭ったことのある人が292人(20%)であり、1,006人(70%)が被害を受けたことがないと答えた。被害の対象物は、果樹が235人、養蜂のための蜜胴が63人、その他が24人となった(図9)。果樹は、カキ136件とクリ52件が多く、ナシ3件、モモ1件、ヤマモモ1件もあった。その他、家屋の壁にあるハチの巣を食べるために壁を壊した、タケノコ、生ゴミ、雑穀、漬物、野菜などの食害、マツや造林木のクマ剥ぎ、

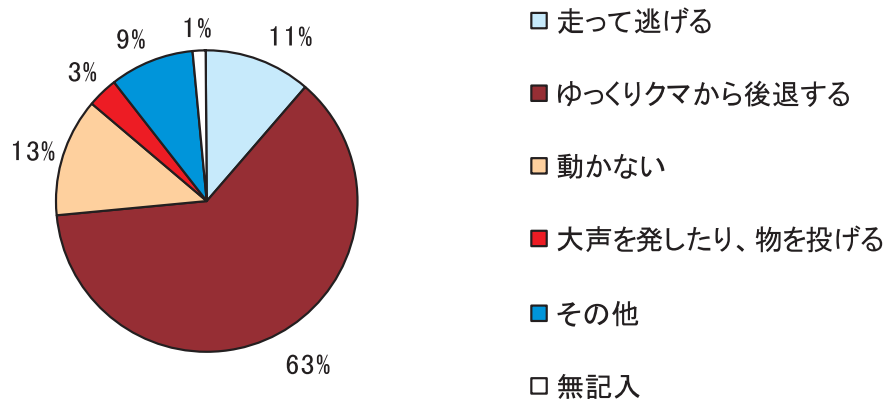


図7 クマに遭遇した際の対処方法

出没による精神的被害の回答もあった。

市町村別にクマによる被害の有無をみると、匹見町が他の市町村に比べて被害を受けた人が多く、回答者の60%にも達した。ついで、柿木村、日原町、六日市町、美都町の順であった(図10)。

被害の対象物は、いずれの市町村でも果樹が多かったが、日原町では養蜂(蜜蝋)の被害も多かった。匹見町では、養蜂や果樹被害の他にもイネや山菜(ウデジカ)、タケノコ、トウモロコシ、漬物など多くのものが被害を受けていた(図11)。

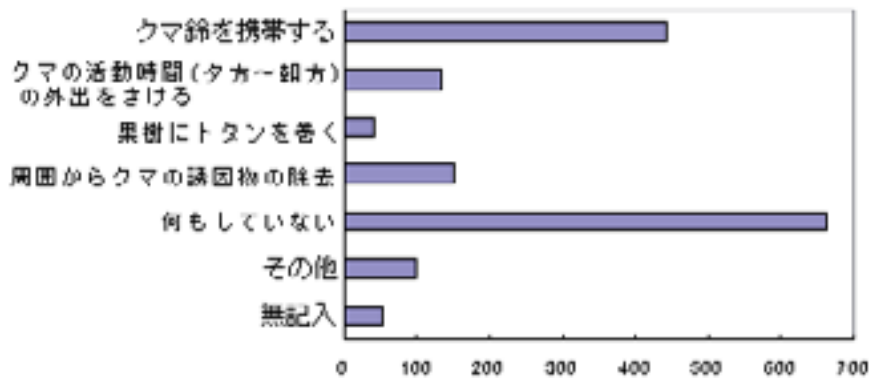


図8 クマ対策

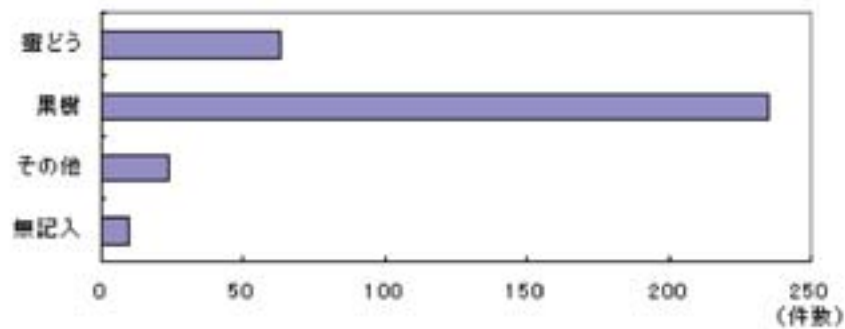


図9 クマによる被害の内容

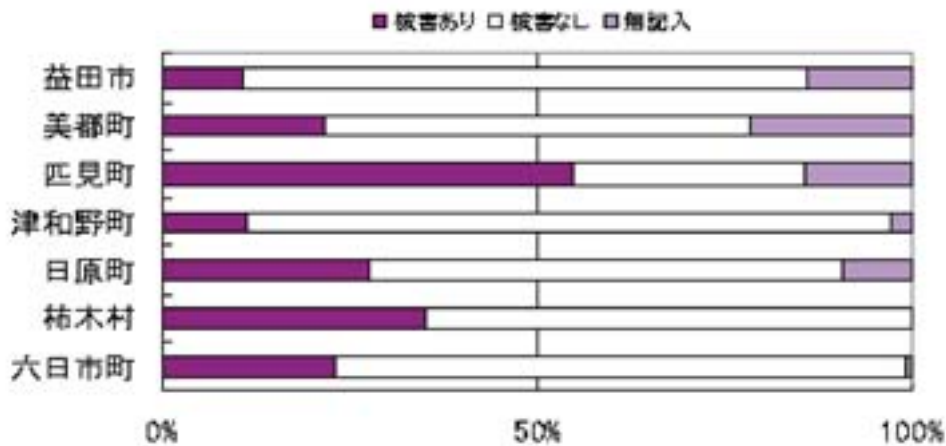


図10 市町村別のクマによる被害の有無

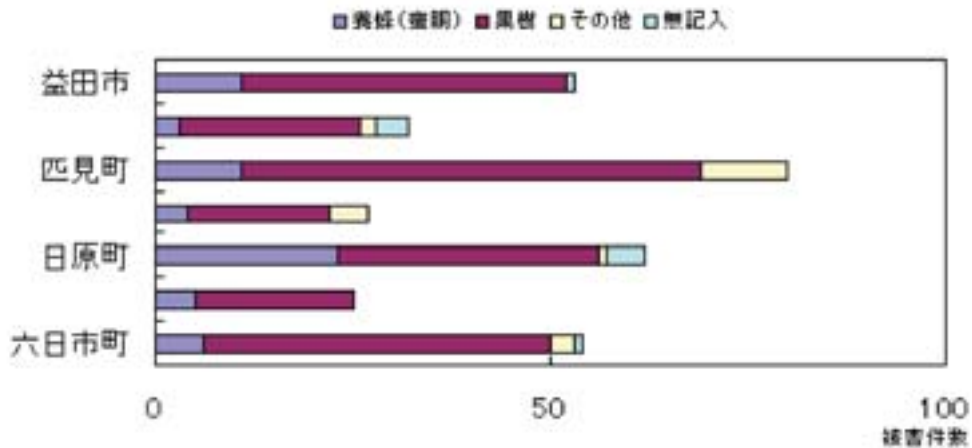


図11 市町村別のクマの被害件数

10. クマ対策はとっていましたか？

クマ対策を講じていた人はわずか42人（14％）であった。対策をしなかった理由としては、クマの被害に遭うとは思っていなかったが82人、対策が間に合わなかったが21人であった。

11. 被害後の対策は何をしましたか？

何も対策をとらなかった人が143人（47％）、対策をした人は89人（29％）と少なかった。対策をとらなかった理由としては、「有効な対策がない」、「被害だとは思わなかった」、「お金や手間がかかる」、「エサとしてクマに提供している」などの意見があった。対策としては、誘引物の除去、トタン柵や網等による障害物の作成および電気柵の設置であった（図12）。

12. クマの出没後、市町村や県に連絡しましたか？

「連絡した」が111人（38％）、「連絡していない」が136人（47％）、無回答が45人（15％）であった。クマが出没した際に半数の人が市町村や県に通報をしていないことがわかった。

13. 連絡をした際、市町村や県はどう対処しましたか？

クマの出没を市町村や県に連絡した際の対応は、「捕獲檻を設置した」が23人と最も多く、「有線放送で情報を流した」、「立て札を設置した」、「見に来て、クマに注意するように言われた」などであった。一方、「連絡をしたのに何もしてくれなかった」が16人もあった。また、市町村や県ではなく「警察や猟友会に連絡した」も少数あった（図13）。

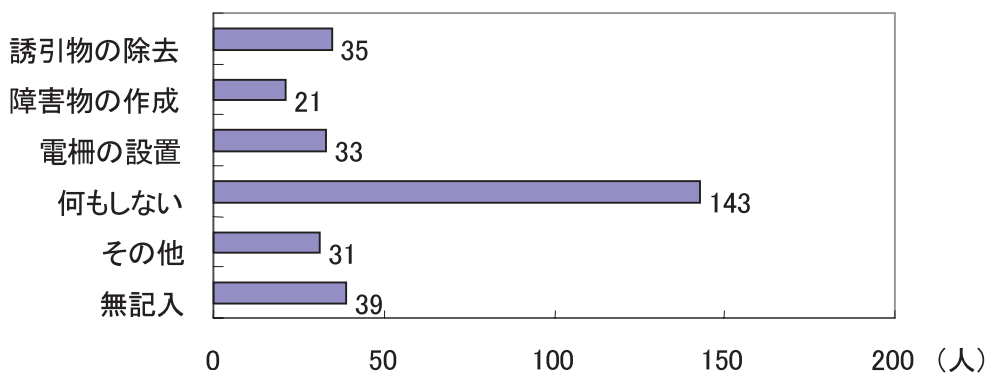


図12 被害後の対策

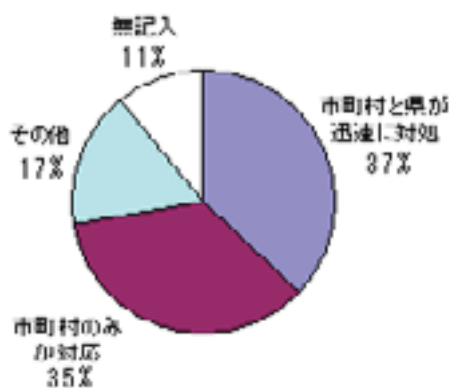


図13 連絡後の対応先

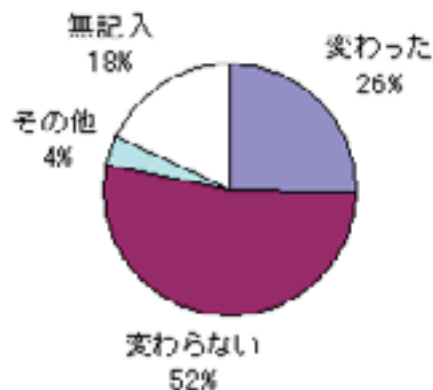


図14 被害後のクマに対する考え方の変化

14. 被害を受けてクマに対する考え方は変わりましたか？

考え方が変わったという意見では、「クマの存在を身近に感じて朝方や夕方外出を控えるようになった」、「家の周りのクマの餌となるような誘因物を除去するようになった」などの注意をして行動するようになったが34人と最も多かった。ついで、「クマはいらないから殺してほしい」が21人であった。また、「恐怖を感じた」、「怖くて山に行けなくなった」などの意見が14人あった。一方、「クマがエサ不足で可哀相だ」、「人が山に植林したからエサが足りなくなった」などのクマに同情する意見も9人あった（図14）。

15. クマ対策について、県と市町村に望むこと

「クマを減らして欲しい」、「予防措置をとって欲しい」が各25%あった。ついで、「迅速な対応」が12%であった。「クマを減らしてほしい」という意見の中には、「クマは見ついたら、すぐ殺してほしい」、「クマは害獣でしかない」、「安心して生活ができない」という切実な意見が多

くあった。予防措置としては、「クマが里に下りて来ない対策をとって欲しい」という意見が多数を占めた。対策としては、森林整備の要望が多く、「クマの餌となるものを植えて欲しい」、「クマが里に下りてこないような森林整備をして欲しい」が多かった。他にも、「クマが出没した際には迅速に情報を流して欲しい」、「被害対策の方法を普及」、「放棄果樹や近所の養蜂蜜罅、果樹の管理を行政から注意をして欲しい」などの意見があった。

16. あなたはクマ対策にいくらお金を出せますか？

「出さない」が31%と最も多く、ついで「1,000円以下」が26%であった。「出さない」という回答者の中には、「クマと関わりがないので関心がない」、「生活が苦しいのでクマにお金を出せない」、「行政がお金を出すべきだ」などの意見があった。「1,000円以下」と回答した人の多くは、「少額ならクマ対策に協力する」という意見だった。「その他」としては、「自治体で決めたら、お金を出す」、「本気でクマ対策をするなら」などであった。

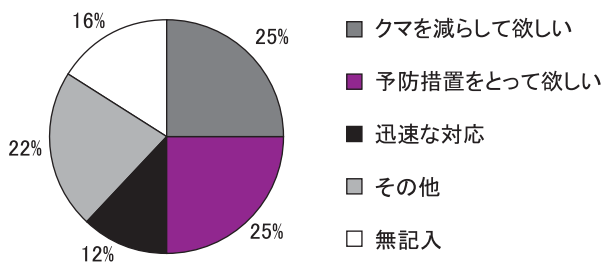


図15 県と市町村に望むクマ対策

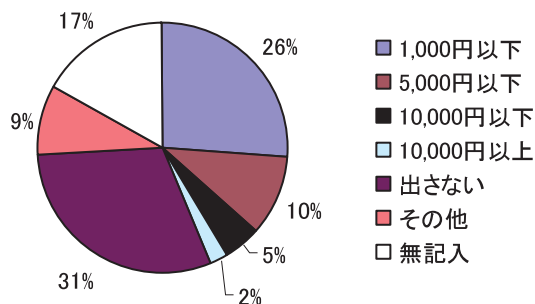


図16 クマ対策に支払える金額

IV. ま と め

1. 益田地域の中では、匹見町の住民が他の市町村に比べてクマとの接触頻度が高かった。
2. クマに嫌悪感を持っている住民が多く、地域別にみるとクマの出没頻度の高い地域順に嫌悪感を持っている人の割合が高く、クマの存在が精神的な負担になっていた。
3. 益田地域の住民はクマ対策を半数の人が実施しており、クマ対策は身近な問題であった。
4. クマの出没後に行政機関へ連絡をしない人が半数もいることから、これまでのクマの出没件数は報告数の2倍以上であったと推測された。また、連絡をしたにもかかわらず、県や市町村が何もしてくれなかった場合が多かったことから、行政としての対応を再検討する必要があると考えられた。
5. クマの生態や行動特性の知識を持っている人が多く、クマに対する情報がある程度は普及されていることがわかった。しかし、遭遇した際の対処法としてクマに積極的に攻撃すると答えた人が10%もいたことから、今後さらにクマについての普及啓蒙の必要性があると考えられた。
6. 今後、本調査の結果を基に、地域住民の理解と協力が得られるクマの保護管理対策について検討していく必要がある。



写真1 道路にあったクマの糞(美都町)



写真2 クマ棚ができていいるクリ園(柿木村)



写真3 益田地域に多い養蜂蜜脧(日原町)



写真4 クリに登ろうとしているクマ(柿木村)



写真5 クリを食べた痕跡(六日市町)



写真6 カキの木の下にあったクマの糞(益田市)



写真7 クリ園で有害捕獲されたクマ（吉賀町）



写真8 クマがミツバチの巣を食べるために壊した家壁（益田市）



写真9 カキの周囲に設置した電気柵（匹見町）



写真10 クマ対策のトタン巻き（美都町）



写真11 人家の裏庭で認めたクマの糞（美都町）



写真12 米倉庫の大型冷蔵庫に認めたクマの前足跡（美都町）

